【書評】

林 青樺著
『現代日本語におけるヴォイスの諸相——事象のあり方との関わりから——』
佐藤琢三

1. はじめに

『現代日本語におけるヴォイスの諸相——事象のあり方との関わりから——』（以下、「本書」と呼ぶ）は、林青樺氏（以下、「著者」と呼ぶ）により執筆され、2006年1月に東北大学文学研究科に提出された学位論文「現代日本語におけるヴォイスの研究——事象達成の観点から——」に「最小限の加筆訂正」（p.227）の上、公刊されたものである。事象のあり方との関わりという観点から、受身文、可能文、自動詞文、他動詞文といった構文の特質を明らかにしている。

現代日本語のヴォイスに関わる諸問題はこれまで非常に活発に議論され、その研究成果の蓄積は膨大である。ヴォイスとは2つの構文の対立がなす現象であり、あくまで体系だった文法概念である。そのためか、従来の多くのヴォイス論はヴォイス全体という高所から諸構文を位置づけるスタンスがとられてきたと言われるが、本書はあくまで個々の細やかな言語事実に対する詳細な観察に立脚する姿勢をとっている。

本稿は次節以降において本書の目的と内容を概観し、最後に評者の立場からこれらに若干の論評を加え、本書が成し遂げた功績と今後の可能性について考えていきたい。

2. 本書の概要

本書は以下の構成をなしている（各章の副題は省略する）。

第Ⅰ部 序論
第1章 ヴォイス（voice）とは何か
第2章 先行研究の概観
第3章 本書の目的・方法及び概要

第Ⅱ部「能動—受動」の対立・非対立をめぐって
第4章 「能動—受動」の対立が成り立たない〈慣用的受身文〉の位置付け
第5章 動詞の意味から見た受身文の多様性と連続性

第Ⅲ部 事象成立のあり方から見たヴォイス
第6章 事象成立のあり方から見たヴォイスの対立

NII-Electronic Library Service
第7章 事象達成点のあり方をめぐって

第8章 現代日本語における実現可能文の意味機能

第9章 事象の生起に関わる諸要因から見た自動性・他動性とヴォイス

第10章 事象の生起に関わる諸要因から見た自動性のあり方

第11章 事象の生起に関わる諸要因から見た受身文の「に」「から」「によって」の意味解釈

第Ⅴ部 本書の意義と今後の展望

第12章 本書の意義

第13章 結びと今後の展望

また、本書の目的は次の通りである。

(I) 「太郎は仕事に追われた」などのような能動文との対立をもたない受身文の位置付けを明確にし、受身文におけるヴォイスの対立のあり方を明確にする。

(II) 受身文や可能文等の各構文の意味機能がヴォイスの対立とどのように関わるかを考察し、ヴォイスの対立・非対立を左右する原因を明らかにする。

(III) 実現可能文と無標動詞文における動作・状態の「存在」と「実現」という事象のあり方を検討し、それぞれの構文の意味機能を明らかにする。

(IV) 自動性と他動性の概念規定をした上で、ヴォイス的諸構文の特徴を自動性・他動性の観点から論じ、ヴォイスとの関係を明らかにする。

ヴォイス的対立は両構文が基本的（ほぼ）同じ事態を表すという前提で論じられるのが普通である。しかし、細やかな言語事実の観察を積み重ねると、それぞれの構文は固有の意味機能を有しているのであり、ヴォイスと事象のあり方の関係は、従来の前提よりもより多様で複雑であることが明らかになる。本書は周辺的とも言えるさまざまな言語事実にも目を配り、ヴォイスの諸問題に新しい光をあてるものである。

3. 第Ⅱ部について

第Ⅱ部（第4章・第5章）では〈慣用的受身文〉の位置づけを論じている。慣用的受身文とは、「慣用的な表現として受身形が定着しているにも関わらず、対応する能動文が成り立たないもの」(p.54) であり、「太郎は仕事に追われた（*仕事は太郎を追った）、彼は友達にたずねられて笑った（*友達は太郎をたずねた）などが該当例である。このような能動との対応関係の認められないものに関しては、一部の先行研究のように受身文とは認めない立場もあるが、第4章において「《受身》のニュアンスがまだ生きてているため、自動詞としては認めがたい」(p.55) とし、これらを一種の受身文として位置づける立場を明確にしている。より具体的には、普通の受身文が動詞無標形を述語とする能動文との対立によって成り立っているのに対し、慣用的受身文は二格に有情名詞性をとる〈直
接受身文 I》（例：「人が犬に追われる」）における述語の意味が比喩的転用により抽象化してえられると主張している。また、第5章では「打たれる」という述語に特化して、慣用的受身文も含む受身文の意味的な多様性と連続性を論じている。分析にあたって、二格名詞句と受け手に与えられた衝撃の具体性と抽象性に注目し、「打たれる」の受身文をもっとも具体的な A（例：「太郎が花子に頭を打たれた」）からもっとも抽象的な F の慣用的受身文（例：「太郎が悲しみに打たれた」）まで6つのタイプに分類し、受身文の意味のバリエーションに程度性・連続性が認められることを述べている。また、これにより慣用的受身文が能動文との対立をもたないものの、受身の形をしていることに必然性を認め、自動詞文ではなく受身文として位置づけることの傍証としている。

以上のように、慣用的受身文をあくまで受身文の一種としてとらえ、能動文からではなく基本的なタイプの受身文からの派生という形でとらえた第2部の主旨は首肯できるものである。もちろん一部の先行研究のようにこれらを能動との対立がないことを理由に受身として認めない立場も成り立つが、本書の分析は母語話者の自然な言語直観にも合致するものである。

ただ、気になった点もあった。第5章において「打つ」の受動形「打たれる」の文を受身文の一事例として取りあげたことの意義づけに関する議論がやや曖昧だった点である。「打たれる」に特化した形の第5章の議論は、慣用的受身文が想定される能動文（動詞の無標形の文）からえられるものではなく、最も典型的な直接受身文が意味的に抽象化（比喩的転用）することによってえられるとする全体の主張をどのように支持するものなのだろうか。第5章では、慣用的受身文 F が最も典型的な受身文 A から B、C、D、E の中間的な段階を経て漸次的な連続線上に位置づけられることを論じている。この漸次的な連続性は、慣用的受身文の成り立ちにどのように関与しているのか。

第5章は連続性の記述を精緻に行う一方で、慣用的受身文 F の「打たれる」はもっとも基本的なタイプの受身文から意味派生したものとし、図1（p.87）において、A と F を B～E を介さずに点線で結び、その直接的な関係性を示している。著者の立場として、慣用的受身文 F は B～E の中間的段階があったからこそ成り立っているとみるのか、それとも中間的段階はなかったとしても慣用的受身文は成り立つものであり、「打たれる」というケースにおいてたまたまこのような漸次的連続性が認められるだけであるとみるのか。素直に全体を読めばこの漸次的連続性あってこそ慣用的受身文と考えている印象を受けるが、「「打たれる」とAから「比喩的転用」で生じたもの」（p.89）という説明からは後者ではないかとも読める。「「能動－受動」というヴォイスの非対立の原因を探る」（p.49）という第5章本来の目的に応えるのは、最も基本的なタイプである A から慣用的受身文 F への抽象化（比喩的転用）であり、漸次的連続性という言語事実は必ずしもその問いに直接的に応えるものではないはずである。A から F への意味の抽象化は、原理的に考えて中間的段階を前提に成立するものではないからである。また、「打
たれる」においてこのような連続性がみられる一例を示しているが、この一例が一般論に示す意義は何なのか注2。このような連続性を描けなくても慣用的受身文が成立立つ場合、それをどう理解すればよいのか。このような疑問や混乱を生じさせないためにも、事例研究としての第5章の意義づけに関するより明確な議論をしてはよかったと思う注3。

4. 第3部について

第3部はヴォイスに関わる諸構文と事象成立のあり方を論じている。具体的には直接受身文、実現可能文の意味的特徴を無標の動詞文との対比において明らかにしている。

まず第6章では、「事象成立のあり方」に関する定義付けを行い、能動文と直接受身文や実現可能文の異なりを明らかにする。本書の言う事象とは「動詞文の表現する出来事」(p.99)であり、「その出来事が完全に成立すること」(p.99)を事象成立と考える。

事象成立のあり方は、①事象の達成点に至りそれが完結した《成立》，②事象の達成点に到達せず完遂されなかった《未成立》，③動作や変化がまったく生起しなかった《未生起》に分類される。一般的に、直接受身文は対応する能動文と知的意味を同じにするという前提で論じられるが、本書はこの前提に拘泥することなくこれらの構文の意味機能の差異を指摘する。肯定文の場合、能動文（例：「XがYを倒した」）と受身文（例：「YがXに倒された」）はいずれも《成立》を表す。ところが、否定では能動文（例：「XがYを倒した」）は《未生起》しか表さないのでに対し、受身文（例：「YがXに倒された」）は《未成立》とともに《未成立》をも表すと解釈できる。つまり、「YがXに倒された」と言った場合、「XがYを倒そうと働きかけたがYは倒れなかった」という《未成立》の解釈も十分に可能である。一部の先行研究では、受身文が「行為」ではなく「過程」を表すとされているが（中右（1994））、本書は否定文の意味に着眼し、これと軌を一にさせ指摘したものであると言えよう。

第7章は、同じく事象成立のあり方に関し、無標の動詞文と実現可能文の異同を論じている。動詞の語彙的意味に内在する限界点（一次的達成点）を問題にする場合、「作る」「壊す」のような対象における変化の完成をもって事象が達成される「限界動詞I」において、無標の動詞文の否定（例：「花子がケーキを作らなかった」）が《未生起》しか表さないのでに対し、実現可能文の否定（例：「花子がケーキを作れなかった」）は《未生起》とともに《未成立》をも表すことがある。また、連用修飾成分との共起により表される限界点（二次的達成点）の場合、行為の生起が前提となるため、否定文はいずれも《未成立》を表すことも指摘している。

第8章は、実現可能文の意味機能を無標の動詞文と対比しつつ明らかにしている。従来、実現可能文は《意志性》という意味特徴との関わりが指摘されてきた。しかし、「思いがけずバスの中で好きな人と会えた」のような例は、この観点からは説明し難い。本
書はこのような文について、事象が主体にとって好ましくかつ得難いという特徴を持っていることを指摘する。また、事象の結果の局面に焦点をあてるため、否定において事象の「未成立」を表すことも可能であると述べている。

5. 第Ⅳ部について

第Ⅳ部は「自動性」と「他動性」という概念を検討し、ヴォイスに関わる諸構文の位置付けを論じている。第Ⅱ部、第Ⅲ部と異なって新しい言語事実の発掘を意図したものというよりも、マクロの視点から見て諸構文の関係を明らかにしようというものである。

他動性という概念は、言語普遍的にも積極的な概念として規定され、さまざまな議論されてきたが、その対概念として想定される自動性なるものがそもそも規定可能なものなのか、規定可能としてどのようにとらえられるかは議論の分かれるところである。本書は自動性についても積極的に考えていく立場をとっている。

第9章は、自動詞文、受身文、自発文を取りあげている。事象の生起が内在的ファクターと外在的ファクターのいずれに換るものかをスケールとして示し、各構文を位置づけている。第10章は、受身文と能動文をとりあげ、自動性と他動性のスケール上に位置づけている。強い他動性を有する動詞で作られた受身文は能動文との対立が明確であるが、他動性の弱い動詞で作られた受身文は能動文との対立が成り立たなくなることを述べている。最後に、第11章は受身文における能動文の主語に該当する名詞を示す「に」「から」「によって」の分布と、自動性のスケールとの相関を論じている。自動性が強まるにつれ「に」しか使われなくなると分析しているが、これらの形式の説明に自動性のスケールが最もふさわしい手段なのかどうかも、あわせて考える余地があるだろう。

6. ボトムアップのヴォイス論に向けて

本書の読後の印象を一言で言い表すとすれば、「ボトムアップのヴォイス論」といったところであろうか。ヴォイスとはその概念の成り立ちからして、まず文法体系ありきで議論が始まり、その全体を前提として細部が位置づけられるという見方がされがちである。このような従来の研究の多くは「トップダウンのヴォイス論」だったのかもしれない。

本書の論述は基本的に、個々の構文の細やかな言語事実を虚心坦懐に（したがって無理に全体に合わせることなく）記述し、その位置づけを考えるというものである。本書における事実の観察と記述の妥当性は全体的にみて高い。単純化されたヴォイスの全体像をみているだけでは明らかにならない個々の構文の意味機能を描くことに成果を収めたものとして、本書は評価に値するものである。

では、本書の考察はヴォイスのトップ（全体像）に関して、どのような知見をもたらすものなのかだろうか。本書は第1章において、ヴォイスの概念を「二つの文が互いに形態的（文の述部）・統語的（文の必須要素である名詞句）・意味的な対立関係を成すこと
表わすものである」と言え、従来のヴォイス観と何ら異なるものではない。個々の構文の意味的諸特徴というポトムの観察は充実したものであるが、本書にはそれを出発点としてトップたる全体像や概念を構築し直そうとする意図はあまり感じられない。しかし、ヴォイスの概念を上述のような対立関係を前提とする本書の規定を照らせば、そもそも第Ⅱ部のテーマである慣用的受身文はヴォイスの射程から外れるものである。本書の論述は結果として、自らヴォイスの射程から外した慣用的受身文の意味的諸特徴をもって、それを「ヴォイスにおける事象のあり方」として論じるという形をとっているが、この論の筋道は決して明瞭ではない。新たな発見に満ちた各論であるが、旧来通りの総論と有機的につながっていない。要望として述べるならば、例えば慣用的受身文のようなものをも包含するまちたく新しいヴォイス観を提示するなり、あるいはヴォイスの規定は従来通りのものとしても「＜ガーニ＞ラレル文」のスキームを描くなど、本書の各論の内容をいかした形で、より斬新な全体像を提示してはよかったと思う。

やや不満をいたことも述べたが、そもそも何の向上の余地もない研究などあろうはずもない。さらなる発展の可能性を残しながらも、本書の論考は日本語のヴォイス研究に確かな足跡を残したと言うことができるだろう。著者がこれまで積み上げてきた努力に敬意を表するとともに、研究の一層の隆盛を祈念して本稿の結びとした。

注 1 (Ⅰ)〜(Ⅳ) は、本書 p.45 〜 46 に示されたものを改写者が手短にまとめたものである。
注 2 この点に関連して、「打たれる」が「従来論じられてきた種々の受身文を網羅する数少ない例である」(p.78) と述べている。この形態が連続性を描くためにいい事例であったということであるが、連続性を描くことがどのようにヴォイスの（非）対立の問題に関わるのかの説明が必要である。
注 3 本書では取りあげられていないが、「大根をおろす」に対して「大根がおる」とは言えないように、自他対照も文のレベルでは対立を欠く場合がある。「大根をおろす」における「おろす」も何らかの意味拡張の結果であろうが、種々のタイプの「おろす」の漸次の連続性を想定するのは難しいかもしれない。なお、この種の問題は沼田 (1989) が扱っている。

引用文献
中村実 (1994)「認知意味論の原理」大修館書店
沼田善子 (1989)「日本語動詞 自・他の意味的対応(1)――多義語における対応の欠落から――」『研究報告集(10)』